

I テサロニケ 3 章 1～10 節 「苦難の中での主の慰め」

この手紙を通してパウロのテサロニケの信者たちへの愛がよく表されています。今日の箇所でも苦難の中で励まし合う信仰の友としてのパウロの態度を知ることができます。

1. テモテを遣わした理由（：1～5）

パウロはテサロニケで起こっている迫害の様子を聞いたのでしょう。それで、アテネからテモテをテサロニケに遣わしました。

1～2a 節。パウロはテモテのことを改めて紹介しています。テモテはパウロの同労者として働きを続けています。同労者ということばは他の手紙でも出てくるのですが、ここでは特別に「神の同労者」と言われています。このことばに、テモテに対するパウロの信頼が表されています。「神の同労者」というのですから、神様によって召されて、神様のみわぎのために、神様と共に働いているということでしょう。

そして、この第一の手紙をテサロニケに届けるために、手紙を託して再びテモテを遣わすことになるので、そのための配慮もしているのです。

そのテモテを最初に遣わした理由を述べています。2b～3a 節。主な理由は、テサロニケの信者たちの信仰を「強め励ます」ことです。「強める」という動詞はテサロニケ人への二つの手紙の中で 4 回使われていますが、神様が信仰を強めて確かにしてくださるという文脈で使われています。また「励ます」という動詞は 6 回使われていますが、お互いに励ましたり、勧めたりするという意味で使われています。そのような意味の二つの動詞を合わせて使ってパウロは、テモテを遣わしたのはテサロニケの信者たちの信仰が神様によって強められるように、彼らを励ますためであったと言っています。

パウロが気にかけているのは彼らの信仰の状態であることが分かります。今日の箇所の中だけで「あなたがたの信仰」ということばが 5 回も出てきます。イエス・キリストを信じた彼らの信仰が、忠実であり続けることをパウロは願っています。

パウロたちがテサロニケにいた時から迫害が始まっていました。そして、信者たちに対する迫害は続いていることを聞いていました。ですから、苦難の中でも信者たちが動揺することなく、信仰生活を続けていけるように願い、彼らを励ますためにテモテを遣わしたのです。

信仰者は苦難に遭うということをパウロははっきりと語ります。3b～4 節。この世の人々の価値観や考え方、生活の仕方と、クリスチャンのそれとは違います。ですから、世の中でクリスチャンが信仰に基づいて生きていくときに、衝突が起こり、迫害を受けることになります。パウロは「苦難に遭うように定められているのです」と言います。パウロたちも、残された信者たちも苦難に遭いました。

教会に来られる方の多くは救いを求めて来られると思います。この世における苦難を受けなくて済むようにという意味での救いを求める人々もいることでしょう。しかし、聖書が教えている救いは苦難を避けることではありません。むしろ、イエス・キリストを信じて、救われた人は、この世においては苦難に遭うようになるのです。聖書の教えに基づいて生活するときに、迫害を受けることがあるのです。しかし、神様は苦難を通して私たちの信仰を成長させてくださるのです。

逆に問題なのは、この世において迫害や苦難を避けようとして、妥協してこの世に合わせたり、信仰生活から退いてしまうことです。パウロはそのような危険があることを十分知っていましたから、テサロニケの信者たちの信仰の様子を知るため、そして必要なら助けるために、テモテを遣わしました。

5 節。パウロは、自分たちが伝道して回心した人々が、苦難にあい、誘惑されて、信仰生活から離れてしまうという残念なことにならないようにと願っています。「労苦が無駄になる」とは、信仰者の救いが無効になるということではありません。神様が救いを与えてくださり、神の民とされた者たちは、神様が永遠に守ってくださいます。神によって新しく生まれた者は、新しいいのちに生きることができ、聖霊が共におられて助けてくださいます。ローマ 8:30。神様が永遠にまで導いてくださるのです。ピリピ 1:6。神様が必ず救いを完成させてくださるのです。

けれども、誘惑する者がいるのも確かです。そして、人には弱さがあります。残念ながら、逆戻りし、罪を重ね、新しい性質を損ねて、自分を惨めな者に行っていることもあります。パウロが「労苦が無駄になる」と言ったのはそういうことでしょう。サタンは神様が人に与えた救いを取り消すことはできませんが、その人を惑わして信仰生活から離れさせ、救

いの喜びを失わせようとしします。パウロはそのような危険をよく分かっていたので、テモテを遣わしたのです。

このパウロの態度から、クリスチャンの交わりではお互いの霊的状态や直面している戦いについて気を配ることが大事であることを教えられます。お互いの信仰の状態に気を配り、祈ることから、愛のある具体的な助けが行われていきます。

2. 良い知らせによる慰めと感謝 (: 6~10)

テモテが戻って来て、テサロニケの信者たちの様子を知らせてくれました。

6 節。テモテの報告は、テサロニケの信者たちの「信仰と愛に」についての「良い知らせ」でした。また、パウロが彼らに会いたいと願っているのと同じように、彼らもパウロに会いたがっているということでした。このテモテからの報告を受けてすぐに、パウロはこの第一の手紙を書いたのです。この段落には喜びと神様への感謝にあふれているパウロの様子が表されています。

迫害によって彼らの信仰は揺るがされていないか、そしてパウロについての中傷によって彼らの愛が弱くなっていないか、パウロは心配していました。しかし、彼らはキリストに忠実であり続け、パウロへの温かい思いも保っていました。心配していたことが実際には起こっていなかったため、パウロは安心し、喜びました。

7 節。テサロニケの信者たちの「信仰と愛についての良い知らせ」はパウロたちを力づけました。パウロがコリントで伝道する中でも困難があったようです。「あらゆる苦悩と苦難のうちでありながら、あなたがたのことでは慰めを受けました」と苦しみがひどいものであることを伝えています。

また、他の手紙の中ではパウロが自分の受けた迫害や苦難について列挙して、その後に次のように書いています。「ほかにいろいろなことがあります。さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまずいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか」

(Ⅱコリント 11:28~29)。そのようにパウロは各地の教会の兄弟姉妹のことを祈っていましたし、ある教会の信徒たちが信仰が弱くなっているとかつまずいたという知らせを聞くことがあると、激しい痛みをもってとりなしていました。

しかし、そのよう中で、テサロニケの信者たちの様子を聞いて慰めを受けたと言っています。8 節。兄弟姉妹が「主にあって堅く立っている」ことがパウロの心を生かし、励ましたのでした。

このことは私たちも同じでしょう。関わりのあった兄弟姉妹が今は離れていても、「主にあって堅く立っている」と聞いたら、喜びと励ましを与えられます。

こうしてパウロは、テサロニケの信者たちが主にあって堅く立っていることで喜びと励ましを与えられて、そのことを神様に感謝します。9 節。

それとともに、テモテの報告の中には、テサロニケの信者たちの信仰には、「不足しているもの」があるという報告もあったようです。それでパウロはそのことのために祈っていると云います。

10 節。信仰の内容や信仰者としての態度に関して不十分な点がいくつかあったようです。そういう点については適切な状態にしたいとパウロは思っています。パウロたちは伝道旅行をして、各地で宣教しましたが、彼らの働きは福音を聞いた人々が受け入れ、救われることで終わりではありません。救われた人々が信仰において成長していくこと、信仰者として整えられていくこと、そして教会が建て上げられていくことが彼らの祈りであり、そのために彼らは働きを進めていました。このことがこの手紙を書いた目的であり、4 章以降に具体的に記されていきます。

信仰者はこの世にあっては苦難にあうように定められています。しかし、お互いの霊的状态や戦いを覚えて祈ることができ、祈る中から愛に基づく行動を起こすように導かれます。そして、それぞれの信仰と愛によって喜びと励ましをお互いに与えることができ、ともに神様に感謝をささげることができます。また互いの信仰の成長のために祈り、仕えることもできます。

そのような主にある交わりが与えられていることを感謝しましょう。そして、そのような信仰の友としての交わりを保っていきましょう。